

エルヴェシウスに対するルソーおよびディドロの 哲学・教育論争について

—フランス啓蒙思想における認識・道徳・能力の諸問題—
(その9)

永 冶 日 出 雄

Hideo NAGAYA

(教育学教室)

エルヴェシウスに対するルソーおよびディドロの哲学・教育論争について
—フランス啓蒙思想における認識・道徳・能力の諸問題—
(その1~その8)
『愛知教育大学研究報告』〈教育科学〉第25輯~第27輯,
第31輯~第35輯, 1976年~1978年, 1982年~1986年

Ⅷ エルヴェシウスに対するディドロの批判 (下の五)

—女性の特性と婦人の解放—

8. 『人間論』第二篇へのディドロの批判 その2—女性の特性と婦人の解放

フランス啓蒙思想はフェミニズムの発展にも大きな貢献を果たした。〈最後の哲学者〉コンドルセは女権論者として著名であり、M. ウルストンクラフトとJ. S. ミルは啓蒙思想の撰取に努めた。モンテスキューやヴォルテールをはじめ、多くの〈哲学者たち〉は女性への蔑視と性的な差別を批判している。ルソーのような反女権論者を含むにもかかわらず、一般に啓蒙思想はフェミニズムの源泉のひとつと評価される。⁽¹⁾

女性に対する蔑視と差別はカトリックの教義、すなわちパウロ、アウグスチヌス、トマス・アキナスなどの言葉に支えられていた。なかでもトマス・アキナスは『神学大全』の一章を女性論に当てる。神は男性の補佐として女性を創造した、とそこでは主張された。⁽²⁾ 女性を不完全な存在とみなすプラトン主義も性的な差別を是認する。こうした差別の思想に反し、聖フランシスコ、エラスムス、マルグリット・ド・ナヴァール等々の作品にはフェミニズムの萌芽が認められる。しかし、婦人解放の有力な武器となるのは、一八世紀の感覚論哲学と環境・教育決定論である。⁽⁴⁾

エルヴェシウスも女性の地位と状況に強い関心を寄せた。環境・教育決定論を構築するなかで、彼は男女の平等や婦人の解放を力説する。『精神論』および『人間論』において女性の本質を論じた箇所はさして長くない。とはいえ、L. アバンスールの先駆的労作『大革命以前における女性とフェミニズム』が指摘するとおり、エルヴェシウスの思想は婦人解放の見地から特筆に値する。⁽⁵⁾『人間論』第二篇第十二章を読んでみよう。

<資料21>

A. エルヴェシウス著『人間論』（初版）第二篇第十二章

感覚器官の精粗

経験はつぎのように教える。私たちの観念はまさしく感官に由来する。だが、感官の精密さと精神の高さが比例するわけではない。たとえば、女性は男性よりも繊細な皮膚を持ち、より鋭敏な触覚を有している。（原註）しかし、ヴォルテールのように傑出した精神を示す女性は稀である。幅広く、変化に富み、実り豊かな才能によってヴォルテールは万人を驚嘆させる。

ホメロスとミルトンは生なかばに失明した。視覚になんらかの欠陥があるため、早くから盲目になったと思われる。けれども、このふたりほど熾烈で輝かしい想像力を発揮した人物は存在しない。

（原註）両性の身体組織は若干の点で非常に異なる。だが、そのような相違が女性の精神を劣等にしたと言うのか。否である。「男性と同じ身体組織を有する女性はひとりも居ない。だから、男性に匹敵する精神を持つ女性はありえない」こんな立論が成り立つだろうか。サッフオ、ヒパティウス、エリザベス、エカテリーナなどは天才的な男性と肩を並べる。男性に較べ、なぜ女性は一般に見劣りがするか。より貧弱な教育しか受けないからである。極端に条件の違うふたり、たとえば王妃と下女を対比してみよう。下女は自分の連れ合いと同等の精神しか持たぬ。劣悪な教育からは優れた男も女も育たない。⁽⁶⁾

B. エルヴェシウス著『人間論』（ラ・ロッシュ編全集）第二篇第十二章

感覚器官の精粗

経験はつぎのように教える。私たちの観念はまさしく感官に由来する。だが、感官の精密さと精神の高さが比例するわけではない。たとえば、女性は男性よりも繊細な皮膚を持ち、より鋭敏な触覚を有している。（原註）しかし、ヴォルテールのように傑出した精神を示す女性は稀である。

ホメロスとミルトンは生なかばに失明した。視覚になんらかの欠陥があるため、早くから盲目になったと思われる。けれども、このふたりほど熾烈で輝かしい想像力を発揮した人物は存在しない。

（原註）両性の身体組織は若干の点で非常に異なる。だが、そのような相違が女性の精神を劣等にしたと言うのか。否である。「男性と同じ身体組織を有する女性はひとりも居ない。だから、男性に匹敵する精神を持つ女性はありえない」こんな立論が成り立つだろうか。何人かの著名な女性は天才的な男性と肩を並べ

る。男性に較べ、なぜ女性は一般に見劣りがするか。より貧弱な教育しか受けられないからである。極端に条件の違うふたり、たとえば王妃と下女を対比してみよう。下女は自分の連れ合いと同等の精神しか持たぬ。劣悪な教育からは優れた男も女も育たない。⁽⁷⁾

C. ディドロ著『＜人間論＞への体系的反駁』第二篇第十二章

〔『人間論』135頁〕＜女性の天才は稀である＞この点について異存はない。＜女性は劣悪な教育しか受けぬ＞女性が受ける教育はきわめて劣悪である。しかし、繊細な身体組織をもつことを無視できるか。女性には月経、妊娠、出産が付きまとう。こうした運命のもとで注意を傾注し、省察を持続できるだろうか。君が讚美する天才的な創造や画期的な発明が、不断の専念と研鑽なしにどうして生れよう。若い女性の歩調は早い。だが、ほどなく疲れ、立ち止まる。強い意志に欠ける者が、どうして苦難を乗り越えられよう。女性と権力者はたいした苦勞もせず、人気を博す。彼らほど阿諛追従に囲まれる者は居ない。

天才的な女性が僅かながら存在することは、例外的な事例であって、普遍的な基準にはならぬ。⁽⁸⁾

D. ディドロ著『＜人間論＞への体系的反駁』第二篇への補遺

彼は言う。＜サッフォ、ヒパティウス、エカテリーナなどは天才的な女性である＞ただし、つぎのとおり付言してほしい。「これら少数の事例からなにが結論できるか。天才になれる素質を男も女も等しく持っている。一匹の燕は春を告げる、と」⁽⁹⁾

この章の基調としてエルヴェシウスはつぎのとおり言う。身体組織や感覚器官の精粗が精神の優劣をもたらすのではない。身体の強健な者や五感の鋭敏な者が偉人や天才になるのだろうか。そうではない。正常な身体組織を有する者は、みな充分な素質を持ち、高度の精神活動を営むことができる。以上のような脈絡でエルヴェシウスは女性への蔑視に反論し、男女の本質的な平等を主張する。

＜資料21＞は『人間論』第二篇第十二章の一部とこれに対するディドロの論駁である。ところで、ここにはひとつの書誌学的な問題が潜む。1795年にL.ラロッシュが編纂したエルヴェシウス全集が、従来最良の版本とされてきた。この全集は近年西ドイツでリプリント版が刊行され、日本でも多くの大学や図書館に備えられている。しかし、ラロッシュ編全集に収録された『人間論』と1773年に上梓された『人間論』初版との間には数多くの相違が存在する。本稿（その5）でも指摘したとおり、初版こそ『人間論』のもっとも信頼できる版本であろう。のちになってラロッシュやその他の人々がエルヴェシウスの論述を改竄した、と推測される。⁽¹⁰⁾ただし、このように断定を下すには、なお綿密な検討と論証が必要である。

ここでは＜資料21＞のAとBを比較してみよう。ヴォルテールを称讃した箇所および四人の天才的な女性を列記した箇所が、ラロッシュ編全集『人間論』では削除された。天才的な女性の名を消し取るのは、女帝に対する讚美を鎮静するためと思われる。ロシアの対外政策を警戒する意志、『人間論』初版からエカテリーナ二世への献辞を削除した意志が、

ここでも働いている。

そればかりではない。削除された箇所にはより重要な歴史的背景が秘められている。一八世紀のフランスでは学芸と政治の分野において婦人が重要な役割を占めるに至った。権力の中枢に座したポンパドゥール夫人や文芸サロンを花開かせたレスピナス嬢を思い出すだけでよい。こうした社会的役割の増大は伝統的な規範や法的な規程の欠陥を露呈させていく。なかでも法律における性的差別の典型として王位継承権の問題が論議された。⁽¹¹⁾ 女性を王座から排除するサリカ法典をモンテスキューもヴォルテールも辛辣に批判した。婦人にも政治的能力があることを論証するため、彼らはエリザベスやエカテリーナなど名高い女帝を実例に挙げる。⁽¹²⁾

なお、Dに掲げた文章は『<人間論>への体系的反駁』第二篇補註に含まれ、エルヴェシウスに対する総括的批判の一節をなす。『人間論』初版と照し合せよう。明らかにこれは同書第二篇第十二章への反論である。しかし、ラロッシュ編全集『人間論』だけを読みかぎり、そうした対応関係もまったく判らない。

ディドロも基本的にはエルヴェシウスの環境・教育決定論に賛同する。しかし、彼はここでも生理学の見地に立ち、男女の肉体的な相違を強調する。⁽¹³⁾ ディドロにおける生理学と医学への関心については本稿（その8）ですでに詳しく検討した。ここでは<資料21>のCに誌された想念がどのような女性論に発展するかを辿っていこう。

<資料22>

A. ディドロ「女性について」

女性が無限の多様性を示しながら、極度の強さから極度の弱さにまで波動することを知ってほしい。鼠や蜘蛛を見て気絶するかと思うと、悪逆非道をも平然と犯す。恋の熱情、嫉妬心の奔出、母性愛による没我、狂信的な陶酔、疾風を思わせる騒擾動乱。これらに捉えられた女性を見よ。クロップシュトックの織天使に劣らぬ美しい姿、ミルトンの悪魔を思わせる怖ろしい姿で彼女らは私たちに驚かす。（中略）

女性の内部には極度の痙攣を起し易い器官がある。これが女性を支配して、種々様々な幻想を繰り広げる。ヒステリーの錯乱に捉えられて、女は過去に復帰し、未来に跳躍し、色々な時点に出没する。途方もない想念が湧き出るのも、女性に特有な器官からである。若いときにヒステリーである女は、年取ると信心深くなる。娘時代のヒステリーが老後の活力に形を変えるのだろうか。目や耳が衰えても、頭脳によって見たり、聞いたりする。法悦、見神、⁽¹⁴⁾ 予言、啓示、溢れる詩想、ヒステリーの錯乱。これらはすべて同類の現象である。

B. ディドロ「修道女」

ある夜彼女はひとりで教会堂へ降りて行きました。何人かの修道女が跡を見つけます。彼女は祭壇の前で平伏し、呻きと溜息を洩らすのです。高い声で祈り始めました。やがて彼女は外へ出て、すぐまた教会堂へ戻って来ます。「だれか」と彼女は叫びます。「救いに来て頂戴。これほど清純な魂、これほど純白な心を！ この人が私と一緒に祈れるように」そして、だれも居ない祈禱席を指差し、駆けつけた修道女すべて

に言いました。「みなここから消えてください。この人は私とふたりだけで居たいのです。近づく資格がおまえたちにあるでしょうか。おまえたちの蛮声がこの人の美音を汚し、おまえたちの俗臭がこの人の芳香を消します。早く立ち去って頂戴」⁽¹⁴⁾ 彼女は天に助けと赦しを嘆願します。神が見えました。頭上で天が稲妻を放ち、引き裂け、轟くのです。怒れる天使が地上に舞い降ります。神の眼差を浴びて、彼女の全身が震えます。そして、教会堂のなかをあちこち走りまわり、暗い片隅に逃れて、神の慈悲を願うのです。地面に額を擦りつけ、やっと静かになりました。(中略)

また、ある朝のことでございます。彼女が裸足のまま下着だけで、髪を乱しておりました。大声で喚き、唾を飛ばし、居室の周りを走ります。やがて手で耳を覆い、眼を閉じて、身体を壁に押しつけます。「この渦巻から早く逃れなさい。叫び声が聞えます。地獄です。地獄の深淵です。そこから業火が燃え上ります。業火の火元で亡者が私の名を呼びます。神よ、お慈悲を！ あちらに行き、鐘を鳴らし、修道女を残らず集めて。みなで私のため神に祈ってください。私も必死で祈ります」⁽¹⁴⁾

ディドロの女性論としてしばしば小品「女性について」⁽¹⁵⁾が取り上げられる。これはA.-L.トマ著『様々な時代における女性の性格、品性、精神』に対する書評であり、1772年の『文芸通信』に掲載された。この文章を綴ったとほぼ同じ時期に、ディドロは女性を主題として『ブーガンヴィル航海記補遺』など一連の作品を書いている。⁽¹⁶⁾

「女性について」のなかでディドロはまず婦人特有の多様さ、複雑さ、徹底性を指摘する。女が激情的な行動に駆り立てるのは、鋭敏で繊細な身体組織にはかならぬ。このように生殖器官と精神現象との関連を究明したところにディドロの独創性が存する、とM.デュシェは語る。⁽¹⁷⁾ また、P.ロッコが指摘するとおり、ここでディドロが提示する画像は、伝統的な婦人像と大いに違う。優雅で謙抑な女性ではなく、熾烈で壮絶な女性が彼の作品のなかで躍動する。⁽¹⁸⁾

ディドロが関心を寄せたのは女性を襲う特異な状態や極限の状況であった。ヒステリー、同性愛、狂信、自殺、発狂、犯罪。同じ時期に書かれた異色の長編『修道女』を取り上げ、鬼気迫る狂乱の場面を読んでみよう。家族や社会からの隔離、不断の監視や厳格な修行、宗教的な規範と禁欲的な生活が娘たちを悲惨な状態に追い込む。そうした悲惨は女性特有の生理や感性により倍加され、男性の場合よりもはるかに悲劇的で破滅的となる。言うまでもなく、修道院は大革命以前の女子教育において重要な役割を果たした。良家の子女は大抵修道院に預けられ、結婚するまでそこで修行を続けた。『修道女』に描かれた人間疎外は、特殊の状況でも稀有な事例でもない。彼は親しい人たちから修道院の実態や修道女の悲惨について多くの事実を聴取した。たとえば、この小説に登場する狂女に関しても実在のモデルが確認されている。⁽¹⁹⁾ <哲学者たち>の示す婦人像が概して観念的・典型的と感ぜられるのに反し、ディドロは著しく具象的・臨床的に女性を描写する。

『修道女』研究の第一人者G.メイは、ディドロにおける生理学・医学への関心が性科学や性教育の重視にどのように発展したかを詳細に跡づけた。それは初期の『盲人書簡』や『不謹慎な宝石』から晩年の『生理学要綱』や『<人間論>への反駁』にまで持続する発展である。⁽²⁰⁾ 私たちは『生理学要綱』や『グランベールの夢』で生理学的な色彩の濃厚な女性論を見出し、『航海記補遺』や『修道女』のなかでは痛烈な社会批判を秘めた女性

論に出逢う。彼の女性論は少なくともふたつの側面に分けて考察することが望ましい。その第一は生殖器官や性的特性の重視であって、性科学と性教育の提唱にまで発展する。また、人間疎外をもたらす規範や制度の弾効こそ、第二の側面と言えよう。この側面では従来軽視されていた『修道女』への注目がとくに必要である。こうしたディドロの女性論はエルヴェシウスの女性論にあるときは交叉し、あるときは離反する。

<資料23>

AAディドロ『エカテリーナ二世のための覚書』第十八

前節と同じ論題—女子学舎について

もうひとつ重要な題目がありますが、普通はこれに触れないで済みます。解剖学の簡単な講義が必要なのです。蠟づくりの人体模型を使用すれば、嫌悪の情を催すことなく、自然の真理を把握できます。だれにとっても身体は重要な財産です。しかし、女性の肉体はなんと繊細かつ多病でしょう。女は子どもを生みます。解剖学の僅かな知識がどれほど役立つでしょう。それは母親になるまえも、母親になったあとも必要はなはずです。(中略)

こんな仕方での私の娘には夫婦の義務と子どもの誕生について勉強させました。

妊娠したときの配慮や出産するときの苦しみに関しても、同じ仕方で教えられます。母胎のなかに子どもがいることを自覚させてください。無知な女だけが産褥でうろたえるのです。(中略)

こうして私の娘はつぎの事柄を学び取りました。なにに耳を傾けるべきか。なにを受け入れてはならぬか。どんなときに仲間と楽しみ、どんなときに仲間から遠ざかるべきか。どの人が誠実であり、どの人が粗暴であるか。だれが高雅な作者であり、だれが卑猥な文士であるか。どの書物が読むに値し、どの書物が害悪を流すか。なにが真に女らしいことであり、なにが真に男らしいことであるか。こうした事柄を娘は判別できるようになったのです。⁽²¹⁾

B. エルヴェシウス著『精神論』第二篇第二十章

各国における精神

人間の抱くもっとも強烈な快樂は性愛であろう。この快樂を手に入れるため、女性の気持を惹きつけることが必要である。だから、性の欲望が好かれたいと欲望に発展する。愛を求める男は草花に宿る昆虫に似通う。昆虫は好きな草花と同じ色に身体を染める。惚れた相手の歎心をかうため、彼女の同類になるよう男は腐心する。ところで、一般に女性は観念の世界においても正しさや厳密さより軽妙さや優雅さを好む。これこそ女性に対する教育の所産である。男性もこうした女性の響みに倣い、同じ悪徳に感染していく。

いま述べた弊害を癒すにはふたつの方策しかない。女性への教育を改善すること、その魂を高遠に、その精神を廣大にすることこそ第一の方策である。女性にも崇高な行為や偉大な事業を学ばせるがよい。そうした教育の結果、麗しい女が高貴な精神のみを愛し、美しい手で知慮と徳操の種子を蒔いてくれる。第二の方策は女性から貞節と

いう義務を免除することである。(ただし、この方法を筆者がことさら推奨するわけではない。)貞節を命じられれば、引き換えとして女性は恋人に永遠の崇拜と熱愛を要求する。このような義務がなくなると、女性は好きなときに好きな男を愛する。こうして男性もより自由で聡明となり、一定の時間だけを愛の快楽に費やす。残りの時間を勉学と省察に捧げれば、男性の精神はきわめて広大で強固になる。⁽²²⁾

<資料23>のAとBはいずれも女子教育の改善を提案した文章である。ここにディドロとエルヴェシウスの相違が顕著に現れている。ディドロは女子教育の中心的な課題として生理学、なかでも性科学を学ばせるよう助言する。J. M. ドールが分析したとおり、女に職業教育や専門教育を授けることをディドロは考えていない。男女に共通とされるのは初等教育だけである。こうした教育観から判断すれば、ディドロは婦人の社会的進出に消極的であったとも評価できる。⁽²³⁾女には妻となり、母となる準備こそ肝要である。このような信念はロシア女帝への建議においても娘アンジェリックの養育においても一貫している。とはいえ、彼は医学や性科学の役割を強調し、女性を現実の不幸や悲惨から救い出そうと努める。これらが性に対する抑圧や謬見を払拭することから始まることは言うまでもない。

女性もまた文化の発展や社会の進歩に貢献できる。学問、芸術、法律、政治等々の分野にまで婦人の勉学を拡大しよう。すでに『精神論』のなかでエルヴェシウスはこのように提唱した。素質平等論や環境決定論の輝かしい成果がここに見られる。こうした提唱の基盤として文芸サロンの隆盛や名流婦人の活躍があったことは勿論である。ヴォルテールが愛したシャトレ夫人のように女流科学者すら啓蒙の時代には出現した。I. カミングは指摘するとおり、ウルストンクラフト、ベンタム、J. S. ミルなどがエルヴェシウスの婦人解放論を継承する。⁽²⁴⁾

さて、『精神論』で提案された第二の方策は性愛の自由を保証することである。そして、現存の婚姻制度の根底から批判する点において、ディドロとエルヴェシウスはふたたび接近し、共鳴し合う。似通ったふたつの文章をつぎに掲げる。

<資料24>

A. ディドロ著 ブーガンヴィル航海記補遺

オルー「私たちが変化することを禁ずる教説ほど莫迦げたものがあるでしょうか。それは絶対不変という神業を要求します。それは両性の結合に際して雄からも雌からも自由を奪うのです。ほしいままに快楽を味わうことを許された者が、則をも越えず、貞節を守るでしょうか。たえず模様が変わる大空、落石の危険もある洞窟、やがて砂礫に帰する巖、風雨で傷み易い樹木、崩れ落ちそうな石垣。こうした自然に囲まれて、堅く抱き合うふたつの肉体だけに、どうして永久不変を誓わせるのですか。(中略)

タヒチでは男も女も成人になると、盛大な式典で祝われます。娘の場合には前夜から若者たちが彼女の小屋を取り巻き、夜明けまで合唱の声や楽器の音が響き渡るので。陽が昇ると、娘は両親に伴われて囲みのなかに入ります。そこでは若者たちが

踊ったり、跳躍や闘技や競走を楽しんでいます。その場でひとりの若者が選び出され、彼女の前で裸になり、様々な方向にあらゆる姿勢を取るのです。男が成人になるときに、祝賀と祭典の準備をするのは娘たちです。彼女らのなかからひとりの娘が選ばれ、成人した若者の前に裸体を披露します。なんの遠慮も未練もありません。私たちの小屋で御覧になったように、残りの儀式は草葉を敷いたベッドのうえで挙行されます。夕暮に娘は両親の家に帰っても構いません。気に入れば、選んだ若者の家に移り、好きなだけそこに居てもよいのです」⁽²⁵⁾

B. エルヴェシウス著『人間論』第十篇への補遺

「人間の意志は変り易い」このような前提に立ちながら、国法は結婚の解消を許さない。大変な矛盾撞着である。ここからなにが発生するか。無数の夫や妻が不幸に陥る。不幸は相互の間に憎悪を生み、憎悪は残酷な犯罪を惹き起す。なぜ別れることが許されないか。農耕という人類の営みが夫婦の結合を不変のものにした。

農耕生活において夫婦は相互の協働を必要とし、結婚の束縛をあまり感じない。夫が土を掘り、畑を耕す一方、妻は鶏を飼い、牛を育て、羊毛を刈り、住居と宿舎を掃除し、夫や子どもや使用人の食事を用意する。こうした夫婦は同一の目的、すなわち作物の増産に心を傾け、自分の生き方に迷いを見せない。どうして彼らが倦怠に襲われたり、嫌悪を感じよう。つねに同一の行動を取り、たえず相互の協働を必要とする夫婦が、離婚など考えないのは当然である。

教会や軍隊や行政は違う。これらの職務は夫婦の協働をなんら必要としない。回教の僧侶、トルコの大臣、アラビアの裁判官などに嫁いだ女はなにをするのか。彼女らは贅沢な工芸品と変らない。民族が異なれば、男女が結合する形態も様々に違う。ある国ではひとりの男が複数の妻と複数の妾を持つ。ほかの国では二年か三年試したり、楽しんでから正式に結婚する。また、女性が共有とされる国もある。そこでは愛が燃え尽きる瞬間に、結婚も解消される。どうすれば新たな結婚の形態が確立できるか。立法者よ、慣習や謬見という暴君からどうか自由になってほしい。そして、公益および夫婦の幸福だけを増進するよう構想してほしい。離婚の制度をどうしても造れ、とは言わぬ。夫婦の結合を甘美にする方策を探し、見出すことこそ肝要である。そうした方策が発見されれば、婚姻制度を変えなくともよい。国法を最善のものから次善のものに変えること、国民の福祉の総和を削減することはなにびとも許されぬ。また、国民過半の幸福を侵害しないかぎり、個人の快樂を遮ってはならない。

こうした重要な問題がなぜ解決されないか。どの民族も因習に浸りきり、危機が迫るまで無為無策で済みます。現在の婚姻制度に弊害があっても、天下国家を揺がすには至らない。天下がとにかく大平であれば、立法者は安心して惰眠を貪る。⁽²⁶⁾

『ブーガンヴィル航海記補遺』でディドロは太平洋の孤島タイチに題材を取り、旅行者からの見聞に自己の虚構を織り混ぜている。ここでは未開社会の風俗とヨーロッパの習俗とが対比され、とりわけ女性に関する事柄、性愛や結婚や家庭のありかたが論じられる。＜資料25＞のAから窺われるとおり、ディドロはタイチ島の住民オルーの口を借りて、男女の平等、性の解放、婚姻の自由を清新に描写した。たえず自由を求める人間本性にこう

した習俗がよく合致する、とオーは言う。タイチにおける女性の自立は、質朴な生活や財産の共有を前提としており、ディドロが未開への復帰を短絡的に推奨するのではない。しかし、『修道女』で悲惨な女性の極限を叙した彼は、ここで幸福な女性の極致を語る。アメリカの研究者 D. グッドマンが分析するように、ヨーロッパ社会の改革を目指す熱情が、『航海記補遺』の内面には脈打っている。⁽²⁷⁾

『人間論』にもこれに類似した一文が見出される。女性に対する差別と抑圧が社会制度や宗教的規範に発することを、ディドロの著作は明らかにした。さらに進んでエルヴェシウスは経済活動と婚姻制度の関連を指摘する。彼によれば、分業の確立や文明の発展のよって女性の地位と役割が低下した。それゆえ、政治や社会の根本的な改革が肝要である。そして、女子教育の改善、女性の社会的進出、結婚・離婚の自由なしに男性の向上と婦人の幸福もありえない。

現在の婚姻制度を改革することに関しては、〈資料24〉の B もやや曖昧な表現を含んでいる。性的放縱を讚美したとも、現状維持に後退した、とこれを解釈する人もあろう。『航海記補遺』をも含め、こうした表現は〈哲学者たち〉の著作にしばしば現れる。しかし、ヨーロッパの為政者が改革に取り組むよう、エルヴェシウスは明らかに叱咤している。〈哲学者たち〉の著作が当局から危険とみなされた一因はそこにある。実際に為政者への叱咤がとくに籠められた箇所、〈資料24〉の B として訳出した最後の数行「こうした重要な」から「惰眠を貪る」までが、ラロッシュ編全集では削除されている。⁽²⁸⁾

女性の解放をめぐるエルヴェシウスとディドロの応酬にふたたび帰ろう。

〈資料25〉

A. エルヴェシウス『人間論』第一篇への補遺

女性が創造されたのは、男性の快楽を充たし、男性の欲望を触発するためである、とトルコ人は考える。自然の示す道を進め、こうした信念に基づいて、トルコでは女性の美に色々な粉飾を凝らし、男心を惹く技巧に磨きをかける。これほど容易な仕事はない。だが、後宮に閉じ籠められた美女にだれが近づけよう。女性が万人のものとされる国を想定してほしい。そこでは女性の魅力が増すのに応じて、悦びを感じる男性も殖える。愛の技巧がどれほど開発され、彼女らがどれほど妖艶になろうと、国民全体の福祉が損われることはない。その際にはつぎの一言で足りる。「女性たちよ、そなたの美と愛をなによりも大切にしてください。天分や気概や徳操において傑出した人物だけが、それを受けるに値する」徳と才能を高めようと志す者に、このような愛がどれほど励しになることか。トルコでは女性が愛の技巧を極めても、たいした弊害は起らない。女性が後宮に置かれるのではなく、万人の共有でもないヨーロッパは違う。フランスの家庭は開放的に見える。しかし、女房が艶麗になると、亭主が喜ぶだろうか。不安になる、と筆者は思う。天成の麗質が洗練された技巧によって一層光り輝くことを、ヨーロッパの法律と習俗は妨害する。婚姻に関する法律の改正が早晚必要であろう。⁽²⁹⁾

B. ディドロ著『〈人間論〉への体系的反駁』第一篇への補遺

『人間論』 72頁) <天分や気概や徳操において傑出した人物だけが、それを受けるに値する>

こうした理想はプラトンを想起させる。だが、自然を無視した幻想である。老雄に栄冠を授けることは女たちにもできる。しかし、床を共にする相手には若者を選ぶ。栄誉を与えることと快樂を味うことは次元を異にする。

<徳と才能を高めようと志す者に、このような愛がどれほど励しになることか>尤もである。彼らに愛を捧げれば、女たちはどうなるか。

栄誉ある人物を愛せよ、と教えるがよい。道に外れた女を殖やすだけであろう。そうした教えは自然に反する。(中略)

大望を抱く者や栄達を遂げた者に恋情を寄せよ、と君は女たちに教える。出世や名声が性器を喜ばすだろうか。女の本能を変えることなどできぬ。眼の働きと同様に本能は特定の対象を見据える。凝視するとき、周囲の対象は意識されない。道に背く、とそれを非難するのは、狂気の立法者だけである。

女性から肉体的な特性を剥奪し、天下国家の方便に変えるのか。多少の利点を持つとしても、それは専制的な着想であり、私の心を反発させる。そうした方策が採用されれば、女性の隷従は軽症から重症へと進む。傑出した人物、たとえば偉大な指揮官や為政者に女たちはどう訴えるか。「先生はお偉い方です。でも、私の好みには合いません。祖国は先生に栄誉を授けました。しかし、私が犠牲にされてよいでしょうか。自分には資格がある、と先生は言われます。私の好みも感官も無視して、奴婢にも劣る地位に突き落とすのですか。女性には特有の潔癖さがあります。それを感じることも知ることも男性にはできません。男性がほとんど不快を覚えない事柄も、女性には死の苦しみを与えます。男性は自分の器官を思うようにできるでしょう。女性の器官は意のままになりません。それはかならずしも心情と合致せず、独自の営みを持つのです」⁽³⁰⁾

偉大な才能や徳操を育成するため、エルヴェシウスが情欲の喚起を訴えたことは<資料25>のAから明らかである。こうした叙述が『精神論』刊行の時点から激しい非難を誘発した。⁽³¹⁾ 為政者は功勞ある者に美女を授けよ、と実際にエルヴェシウスが主張したのであろうか。また、ディドロに批判されたように、彼が女性を賞状や勲章と同列に扱ったであろうか。確かに未開民族や古代ギリシアにおける事例としてそのような史実が『精神論』で紹介されている。⁽³²⁾ しかし、先入見を捨てて、<資料23>のBおよび<資料25>のAを読んで頂きたい。婦人を圧制や因習から解放するとともに、彼女らの教養と見識を高めることがそこでは提案される。自由で開明的な女の愛慕ほど、男を鼓舞激励する動因があろうか。こうした主張への誤解は『<人間論>への反駁』にも潜んでいる。しかし、異性への愛が若者が精神的発展に寄与することを、作家スタンダールは『精神論』⁽³³⁾ から学んだ。この点に関して彼のエルヴェシウス読解のほうがかはるかに的確と思われる。

エルヴェシウスの所論を纏めよう。女性は社会改革に関し二重の役割を果たす。彼女らはみずからの教育と生活を向上させるばかりでなく、男性を崇高な行為や偉大な事業へと督励する。かくして婦人を悲惨に陥れた専制政治と宗教的偏見そのものが除去されるであろう。このような女性の社会的役割についてディドロはどの作品でもほとんど語らない。

とはいえ、〈資料25〉のBが示すとおり、情念の解放と恋愛の自由を強調することによって、ディドロの女性論は新しい視野を切り拓く。開明的な女が有為の士や高潔な人かならず愛する、というエルヴェシウスの見解に彼は異論を挿む。それは為政者や哲学者に都合のよい女性像にすぎぬ。女の本性も愛の営みも独自の価値と志向を持っている。女がいかにかに生き、だれを愛するか。これをいかなる権力も思想も命ずることはできない。こうしてディドロは女性みずからの自由と幸福を無限の高みに飛翔させる。

(昭和61年9月16日受理)

註

エルヴェシウスとディドロの著作に関して註では下記の略号を使用する。なお、すでに訳書がある場合も、本稿における引用はすべて筆者自身が訳出した。訳書の該当箇所を併記したのは、読者の便宜を考えたためである。

DDE: Denis DIDEROT et Jean D'ALEMBERT, *Encyclopédie, ou dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers*, par une société des gens de lettres, Paris, Briasson, David, Le Breton et Durand, 1751-1765, 17 volumes.

DM: Denis DIDEROT, *Mémoires pour Catherine II*, éd. P. Vernière, Paris, Garnier Frères, 1966.

DOA: Denis DIDEROT, *Oeuvres complètes*, éd. J. Assézat et M. Tourneux, Paris, Garnier Frères, 1875-1877. 20 volumes.

DOD: Denis DIDEROT, *Oeuvres complètes*, éd. H. Dieckmann, J. Fabre, J. Proust et J. Varloot, Paris, Hermann, 1975-, 16 volumes parus (sur 33).

DOL: Denis DIDEROT, *Oeuvres complètes*, éd. R. Lewinter, Paris, Le Club français du livre, 1969-1973, 15 volumes.

DP: Denis DIDEROT, *Oeuvres philosophiques*, éd. P. Vernière, Paris, Garnier Frères, 1964.

DRL: Denis DIDEROT, *Réfutation suivie de l'ouvrage d'Helvétius intitulé, l'Homme*. dans DOL tome XI.

HE1: Claude-Adrien HELVETIUS, *De l'Esprit*, Paris, Durand, 1758.

HH1: Claude-Adrien HELVETIUS, *De l'Homme, de ses facultés intellectuelles et de son éducation*, Londres, Société typographique, 1773. 2 volumes.

HOL: Claude-Adrien HELVETIUS, *Oeuvres complètes*, éd. L. La Roche, Paris, P. Didot l'aîné, 1795. 14 volumes.

NDE: ディドロ著、野沢協訳「エルヴェシウス『人間論』への反駁(抜粋)」
(小場瀬卓三、平岡昇監修『ディドロ著作集』法政大学出版局、1980年、第2巻)

NEN: エルヴェシウス著、根岸国孝訳『人間論』明治図書、1966年。

NENN: エルヴェシウス著、根岸国孝訳『人間論(上)』日本評論社、1949年。

ODT: 小場瀬卓三、平岡昇監修『ディドロ著作集』法政大学出版局、1976年—1980年、
第1巻、第2巻。

1) たとえば、広汎な読者を持つ下記の書物がそうである。August BEBEL, *Die Frau und der Sozialismus*, Stuttgart, Dietz, 1921. pp.285-286. ベーベル著、草間平作訳『婦人論』岩波書店、1971年。上巻、377頁。Simone de BEAUVOIR, *Le Deuxième sexe*, Paris, Gallimard, 1949. tome I, pp.181-182. ボーヴォワール著、生島遼一訳「第二の性」『ボーヴォワール著作集』人文書院、1966年。第7巻、267-270頁。

2) 「最初の女性が男性の肋骨から造られたのは、適切であるか否か」この問題に対する賛否両論をトマスは紹介し、肯定の意見に軍配を挙げる。Thomas d'AQUIN, *Somme Théologique*, traduction française par A. PATFOORT, Paris, Desclée et Cie, 1963. Les Origines de l'homme (la Questions 90-

- 102), pp.51-79. トマス・アクィナス著, 高田三郎ほか訳『神学大全』創文社, 1965年. 第7巻, 15-32頁。
- 3) 「〈女性〉を不完全な人間とみなすのは, 解剖学者だけではない。プラトン主義の哲学者もそのように考える。(中略)〈女性〉より男性が優る, という謬見は古代人の習俗, 政治学の学説, さらに宗教をとおして様々に形成されてきた」(バルト「女性—人類学的に」) Paul-Joseph BARTHE, *Femme (antropologie)*. dans DDE, tome VI, p.469. 『百科全書』第六巻の項目「女性」は人類学, 法律, 道徳などいくつかの側面に分け, 複数の執筆者により記述された。それらはやや凡庸な感じを与えるが, ときに評されるほど婦人を蔑視していない。
- 4) Katherine B. CLINTON, *Femme et philosophe: Enlightenment Origins of Feminisme*. dans *Eighteenth-Century Studies*, volume VIII, number 3 (spring 1975), pp.283-284.
- 5) 「エルヴェンシュスの著作はディドロの作品とは反対に正当で新鮮な考察を含んでいる。『精神論』! これこそフェミニズムの書物である。ここには様々な近代的理論の源泉が見出される」
Leon ABENSOUR, *La Femme et le féminisme avant la Revolution*, Paris, 1923, p.357-358.
- 6) HHI, tome I, pp.252-253. cf. NEN, 93頁。
- 7) HOL, tome VIII, pp.16-17.
- 8) DRL, p.509. cf. DOA, tome II, p.319.
- 9) *Ibid.*, p.552. cf. DOA, tome II, p.361. NDE, 340頁。
- 10) 本稿(その4)および(その5)『愛知教育大学研究報告』(教育科学)第31輯(1982年), 19-20頁, ならびに第32輯(1983年), 37頁。
- 11) CLINTON, *op. cit.*, pp.287-287.
- 12) 「エジプトのように女性が一家を支配することは, 理性にも自然にも反する。だが, 一国の統治については違う。一家を統率する際には, 女性特有の弱々しさが足枷となる。しかし, 一国を治める場合には, そうした特性から節度や慈愛が生れよう。優れた政治を実現するため, 厳格で峻烈な徳義よりもこれこそはるかに重要である。(中略) スミスによれば, アフリカでは女性による統治が多い。モスクワとイギリスの事例をこれに加えよう。専制政治であれ, 制限政治であれ, こうした国で女性が明らかに成功を収めつつある」 Charles L.B. MONTESQUIEU, *De l'Esprit des lois*. dans MONTESQUIEU, *Oeuvres complètes*, Paris, Gallimard, 1951. tome II, pp.348-349.
cf. モンテスキュー著, 根岸国孝訳『法の精神』河出書房, 1966年, 118頁。
- 13) ディドロと同じように両性の肉体的相違を強調しながら, ルソーの前提と結論は非常に異なる。両者の女性論を比較することも興味深い, 他日の課題に譲りたい。
- 14) Denis DIDEROT, *Sur les femmes*. dans DOA, tome II, p.255. cf. ディドロ, 原宏訳「女性について」ODT, 第2巻, 333頁。
- 15) DIDEROT, *La Religieuse*. dans DOL, tome XI, pp.276-278.
- 16) 作品相互の関連や執筆の事情についてはつぎの論文が示唆に富む。
市川慎一「ディドロの『女性について』再考」『ヨーロッパ文学研究』第30号(1982年), 194-205頁。
市川慎一「ディドロと愛の幻想—『1772年の三部作をめぐる』」窪田般弥ほか編『フランス文学にみる愛のかたち』白水社, 1986年。100-121頁。
なお, ディドロ「女性について」をめぐる日本18世紀学会では共同討議が催された。報告者として市川慎一, 遅塚忠躬, 中村雄二郎, 中川久定の諸氏が選ばれ, とくに遅塚, 中川の両氏は「ブーガンヴィル航海記補遺」との関連を論じた。(各々の報告に関しては, 『日本18世紀学会 学会ニュース』第5号(1981年2月), 2-6頁)
- 17) Michele DUCHET, *Du sexe des livres, Sur les femmes de Diderot*. dans *Revue des Sciences Humaines*, numéro 168 (octobre-décembre 1977), pp.527-528.
- 18) Paul LECOQ, *Sur les femmes*. dans *Europe*, numéro 405-404 (janvier-février 1963), pp.119-121.

- 19) George MAY, *Diderot et "La Religieuse,"* Paris, PUF., 1954. pp.146–147.
- 20) *Ibid.*, pp.98–103.
ただし、修道院での人間疎外をめぐり、メイの関心は同性愛の問題にやや偏している。
この点では下記の論文のほうが悲劇の核心に迫る。
小場瀬卓三著『ディドロ研究』白水社、1972年。中巻、60–67頁。
遠藤真人「ディドロの『修道女』(*La Religieuse*)における人間疎外の描写—不定代名詞 *on* の用法
をめぐる—」『文化』第46巻第3・4号(1983年2月), pp.28–45.
- 21) DM, pp.87–89.
- 22) HEL, pp.206–207. cf. HOL, tome III, pp.66–68.
- 23) Jean-Marie DOLLE, *Politique et pédagogie, Diderot et les problèmes de l'éducation*, Paris, Vrin, 1973. p.90–
- 24) Inn CUMMING, *Helvétius, his Life and Place in the History of Educational Thought*, London, Routledge et Kegan Paul, 1955. p.157.
- 25) DIDEROT, *Supplément au voyage de Bougainville*. dans DOA, tome II, pp.224–230. cf. DP, 480–488. ディドロ, 佐藤文樹訳「ブーガンヴィル旅行記補遺」ODT, 第1巻, 295–302頁。
- 26) HHL, tome II, pp.755–757. なお, 邦訳では各篇への補遺が全部割愛されている。
- 27) Dena GOODMANN, *The Structure of Political Argument in Diderot's Supplément au voyage de Bougainville*. dans *Diderot Studies*, XXI (1983), pp.123–126.
- 28) cf. HOL, tome XII, pp.164–167.
- 29) HHL, tome I, pp.134–135. cf. HOL, tome VII, pp.132–134.
- 30) DRL, p.483–484. cf. DOA, tome II, pp.293–294.
- 31) 「『精神論』を公にしたとき私は、習俗を腐敗させる者と神学者たちから糾弾された」(エルヴェシウス著『人間論』第二篇第九章) HHL, tome I, p.230. cf. HOL, tome VII, p.234. NEN, 85頁。
- 32) たとえば, 『精神論』第二篇第十五章および『人間論』第二篇第七章. HEL, pp.361–366. et HHL, tome I, pp.211–218. cf. HOL, tome IV, pp.124–135, tome VII, pp. 215–223. NEN, 81–85頁。
- 33) Jules C. ALCIATORE, *Stendhal et Helvétius*, Genève. Droz, 1952. pp.212–215.